

## 資料

## 聴覚障害児の語彙に関する文献的考察

左藤 敦子\*・四日市 章\*\*

従来より聴覚障害児の語彙に関する研究は数多くなされてきたが、名詞を中心としたものが多く、動詞を扱った研究は少ない。本稿では、我が国における聴覚障害児の語彙に関する研究を概観し、そこで明らかにされた聴覚障害児の語彙の特徴をまとめた。さらに、動詞を扱った研究を中心に、その研究意義と今後の展望について文献的に考察した。聴覚障害児の語彙研究の現状から、獲得が困難である語に関する、抽象度以外の特徴を明らかにすること、また、心的動詞の獲得について研究を進めることの必要性が示唆された。

キー・ワード：聴覚障害 語彙 動詞 名詞

## 1. はじめに

聴覚障害児が抱える重要な問題として、音声言語の獲得があり、これをとりあげる研究が数多く行われている。最近では音声言語のみならず、手話言語を扱った研究もみられ、音声言語及び手話言語の両側面から、聴覚障害児の言語獲得を捉えることが必要であるとも考えられている。音声言語の獲得及び発達に関する多くの研究で、聴覚障害児の言語獲得は健聴児と異なる特徴があると示唆されているが、どのように異なって特徴づけられるのかについて言及するものは少ない。

一般に、語彙力は言語力の基盤であるとされる。LaSasso and Davey (1987<sup>14)</sup>) や Moog and Geers (1985<sup>19)</sup>) は実験的及び実践的な試みから、語彙力と読み書きの能力の関係について検討し、これらの能力は相補的な関係にあり、語彙力レベルが高い児童は読み書きに関する能力も高いと報告している。また、草薙・都築・板橋(1979<sup>13)</sup>) は聴覚障害児の文理解の能力を高め

るには、語の意味と構文の両側面からの教育的指導が必要であると示唆しており、統語を中心とした研究だけではなく、語彙に関する詳細な検討も不可欠であることが述べられている。

従来の語彙に関する研究では、状態語に分類される感情語をとりあげた研究や形容詞を扱った研究も報告されているが(中富, 1985<sup>23)</sup>; 相馬・関根, 1986<sup>34)</sup>; 大島・山中・中野, 1989<sup>25)</sup>)、その多くは語彙力全体を扱ったものや、事物事象、すなわち名詞に焦点をあてたものであり、動詞に関する研究は数少ない。しかし、聴覚障害児の語彙力に関する報告から、聴覚障害児の表出語彙は、名詞に次いで動詞が多いことが明らかになっており(根本, 1967<sup>24)</sup>; 伊藤, 1970<sup>8)</sup>)、聴覚障害児の獲得語彙を構成する主要な語彙として、動詞に着目することは必要である。また、動詞は文の中核としての働きをもち、統語的な情報を担う点で名詞とは異なって特徴づけられる。そのため、聴覚障害児の語彙発達のみならず、統語の発達を捉えていく上でも、動詞に関するより多くの研究が待たれる。

本稿においては、我が国における聴覚障害児の語彙に関する研究を表出と理解の観点で概観

\*筑波大学心身障害学研究所

\*\*筑波大学心身障害学系

し、そこで明らかになった聴覚障害児の語彙の特徴をまとめる。さらに、我が国で行われた研究に限らず、内外で行われた動詞に関する研究をとりあげて、その研究の意義と今後の展望について文献的に考察する。

## II. 聴覚障害児の語彙力

言語力は一般に表出と理解とを指標として研究が行われてきた。南出(1982<sup>18)</sup>)は、語彙の理解の深さについて受容語彙、理解語彙、表現語彙という3つの理解レベルを想定している。また、国立国語研究所(1980<sup>12)</sup>)では、従来の見解を紹介し、入力した語を対象である事物と結びつけることができる語彙を理解語、出力できる語彙を表現語として分類している。村井(1970<sup>20)</sup>)は獲得した語彙を理解語と自発語とに分類している。理解語とは記号に対して動作で反応できることば、自発語とは記号を音声によって自ら生産できることばと定義し、これらのことばを支える能力は相互に関連しながら発達するが、その発達過程は独立したものであると述べている。

本稿では、個々人が有する意味表象を言語化して外部に産出する活動を表出とし、外部からの情報を内部に取り込んで意味表象を構成する活動を理解と促して論を進める。

### 1. 表出語彙

語彙の表出を測定するために、自然発話の分析、クローズ法、自由連想や作文といった方法が用いられてきた。

岡田(1993<sup>26)</sup>)は、聴覚障害児をもつ母親を対象に質問紙調査を実施し、母親を通じて聴覚障害児の表出語彙を収集している。そして、その集計をもとに各語の頻度から語彙の難易度評定を算出したところ、聴覚障害児の語彙数は健聴児に比べると少なかったが、語彙獲得の方向性は健聴児と同じで、基本的な語から特殊な語へと広がりをみせることが明らかにされている。ここで述べられている基本的な語とは、子どもの身近な生活領域と深く関連づけられる語のことであり、特殊な語とは、生活領域と関連が薄

い語や抽象的な語のことを指している。

川井(1960<sup>11)</sup>)は、連想法によって聴覚障害児の語彙の特徴を明らかにしている。特に、聴覚障害児と健聴児の特質の差異を顕著に示すものとして準名詞に着目して分析を行っている。準名詞とは擬音語・擬態語のことを指し、児童期の初期によく使用される語であると考えられている。この準名詞に関して、聴覚障害児の反応を分析したところ、使用頻度が低い上に、その反応は無意義反応語類型に分類されるものが多かったと報告している。この結果から、聴覚障害児も擬音・擬態を表す音声と事物との感覚的な類似性を健聴児と同様に認知していると考えられるものの、記号としての擬態語・擬音語の理解が他の品詞に比べて遅れていると考察している。

同様に、連想法を用いて、根本(1967<sup>24)</sup>)は生活環境と語彙の関係をみるために、「家」、「学校」、「世の中」という語に対して、聴覚障害児が連想した語を反応語として分析している。その結果、「学校」や「家」といった語に対しては、身近な具体物に関する反応語が多く、健聴児との差がほとんどみられなかった。しかし、「社会」という語に関する反応語では、聴覚障害児は地名などの具体的な名称がその多くを占める反面、健聴児は自然環境や社会事象に関する語彙がみられ、明らかな差異がみられたと報告している。

これらの研究を通して、聴覚障害児に共通した語彙の特徴として、①健聴児に比べた場合の語彙数の少なさ、②擬態語・擬音語の獲得の困難さ、③抽象的な語の獲得の困難さ、④習得語彙の範囲が狭いなどが挙げられる。

### 2. 理解語彙

語彙の理解を測定するために、選択肢法やSD法、語の定義などに代表される方法を用いることが多い。

福田(1967<sup>6)</sup>)は、理解語彙を測定するために見本語を呈示し、その語を知っているかどうかについて被験者であるろう中学生に直接評定させている。同様の方法によって、塚田(1968<sup>26)</sup>)

は、小学部5年生、中学部2年生、高等部2年生の聴覚障害児を対象として、聴覚障害児の語彙力及び語彙の発達について検討している。その結果、聴覚障害児の語彙力は個人差が大きく、その発達は遅いという点で福田(1967<sup>6)</sup>)と一致した見解を示している。また、語の定義説明に関しても、聴覚障害児の理解は健聴児と比較すると未熟であったと報告している。このような内観的な方法は、大量の語彙サンプルの中から、既知の語彙を抽出することができるという利点はあるものの、抽出された語彙に対する理解の深さを検討するまでには至っていない。

中西・大和田(1980<sup>21)</sup>, 1980<sup>22)</sup>)は日常生活で使用される語彙を用いて、その理解を簡便に測定するために、語に対応する絵を同定させるという手続きの語彙検査を試作し、聴覚障害児を対象にその有用性について検討している。この語彙検査では、語と対象とを同定できたものを理解している語と考えている。また、コミュニケーションの基本となる語彙は6歳頃までに獲得されると考え、この語彙検査は就学前後の子どもの理解語彙の評価を対象としている。この語彙検査を用いて、聴覚障害児の語彙力を評価したところ、幼稚部3年生から小学部6年生に至るまで緩やかな上昇傾向がみられ、語彙発達の一端がこの検査で捉えることができたと報告している。また、音声言語の入力が困難である聴覚障害児が獲得している語は意図的に教授されたものであると考えられたため、聴覚障害児の語彙力の低さは教授する側が用いる言語の偏りや狭さに起因する可能性を示唆している。さらに、理解語彙を検討するために選択技法を用いる研究は多数みられるが、選択肢の設定や選び方によっては検査自体の難易度が変動したり、語彙の理解レベルの測定という本来の目的が阻まれる可能性が高いと指摘している。そのため、選択技法による理解の測定では、どのように選択肢を等価に保つかという点が重要である。

南出(1982<sup>18)</sup>)は正しい意味で語が用いられている文を選択するという課題によって、小学部4年生から高等部3年生までの広範囲に及ぶ聴

覚障害児の理解語彙を検討している。聴覚障害児の語彙発達の特徴として、小学部6年生から中学部2年にかけて理解語彙が急激に増加すること、小学部と中学部にかけて個人差が拡大するという点を挙げている。これは、南出・石井(1977<sup>17)</sup>)でも検討されており、理解が容易な語と困難な語は小学部、中学部、高等部を通じて共通していたと報告されている。このように理解が困難である語の特徴は、その語のもつ意味や出現頻度などによっても影響を受けると考えられる。この点では、正答率が低い語には抽象度以外の習得されにくい性質がある可能性を示唆する斎藤・菅野(1972<sup>29)</sup>)や四日市・斎藤・丹(1995<sup>37)</sup>)の報告と一致する。

板橋・細田(1989<sup>7)</sup>)は、動詞と形容詞の意味的広がり発達について意味の正誤判断課題と文完成課題を用いて検討している。その結果、文理解に発達の遅れが認められたものの、学年の進行に伴って語の意味的な広がり発達すると報告している。また、直接的意味による使用から始まり、イメージ的な意味の使用も可能になっていく推移が示唆された。その一方で、学年が進行しても「空が燃える」などの表現を正しいとする反応が低いことから、理解上の歪みがあると指摘し、聴覚障害児の語彙構造は健聴児と必ずしも同じではないと述べている。

関・草薙・都築(1980<sup>32)</sup>)は分類課題と理解課題を実施し、両課題の関係から聴覚障害児が語彙を理解する際に、語のどのような特性に着目しているのかを検討している。そして、語彙力が低い場合、語彙を意味的な側面から捉えて理解しているのではなく、漢字やかな、文字数などの語の形態的な側面から単語を分類する傾向が顕著であったと報告している。

上述の先行研究から、聴覚障害児の語彙獲得の特徴を決定する要因として、①語彙の抽象度の高低、②指導の有無、③自己の経験の影響、④語の出現頻度などが挙げられる。つまり、聴覚障害児の語彙は、健聴児の語彙と量的に異なるだけではなく、聴覚障害児特有の特徴が存在すると考えられる。しかし、これらの要因が語

彙獲得の際に、どのように作用しているのか、あるいは他にも要因があるのかについては、未だ明らかではない。

### III. 動詞に関する研究

ここでは、聴覚障害児の動詞に関する研究の研究意義と今後の展望について検討するために、聴覚障害児及び健聴児の動詞に関する諸研究をとりあげ、文献的考察を試みる。最初に、名詞と動詞の構造に関する研究をまとめた後に、聴覚障害児と健聴児における動詞の表出と理解に関する研究を検討する。

#### 1. 名詞と動詞の構造

動詞は外界の状態や行為を示し、統語的な情報も含意し、名詞とは異なる特徴をもつ。ここでは、動詞に関する研究意義を明らかにするために、名詞と動詞の意味構造の差異及び脳内での処理の違いからみた名詞と動詞の特徴に関して検討した研究についてまとめる。

Martin, Haxby, Lalonde, Wiggs and Ungerleider (1995<sup>6)</sup>) は、絵カードと文字を組み合わせた刺激を用い、命名条件(名詞に関するラベリング)、色名条件(色に関するラベリング)、動詞条件(動作に関するラベリング)の3条件で、脳の活性化する部位を比較した。その結果、動詞の産出においては、左の上側頭回と中側頭回後部で活動がみられたとしている。また、この活性化している部位は、絵カードと文字による刺激呈示の両者間で、ほとんど差異はみられなかったとも報告している。このことから、名詞も動詞も語彙として一括したものとして処理されるのではなく、それぞれ独立した処理機構が存在することが明らかとなった。

Caramazza and Hillis (1990<sup>9)</sup>) は、症状が異なる2名の失語症患者を対象に音読課題と書字課題を実施し、語彙が名詞や動詞のような文法的なカテゴリによって表象されているかという観点で分析を行っている。この研究では、語彙の構造と特性についての明瞭な結果は得られなかったとしているが、文法的なカテゴリの情報はいずれも独立した形で表象されている可能

性が示唆されている。また、Breedin, Saffran and Schwartz (1998<sup>2)</sup>) も、遅延再生を伴う物語完成課題を用いて、失語症患者を対象に動詞の表象に関する研究を行っている。ここでは、意味素性の数による違いから動詞を single verb と complex verb に分類し、意味の複雑さの役割を検討している。ここで定義されている single verb (例: take) とは文脈によって意味が変化しやすい動詞であり、complex verb (例: grab) とは文脈による柔軟性が乏しい動詞のことである。この両動詞の観点から、患者の反応を分析したところ、single verb よりも complex verbの方が意味的に制約が厳しく、意味の特定が容易であることから、complex verbの方が想起されやすいという結果を報告している。また、他の研究結果との比較により、失語症における名詞と動詞の表象は独立したものであるとも考察している。

Behrend (1990<sup>11)</sup>) は幼児を対象に新規動詞のラベリングに関する実験を実施し、従来行われてきた名詞に関する知見を考慮して、名詞と動詞の意味構造の差異について考察している。つまり、名詞は関連する属性をもつ素性によるヒエラルキー構造であるのに対して、動詞はマトリックス構造であるとしている。このマトリックス構造とは、あらゆる意味フィールドを網羅する構造であり、動詞は移動(transfer)や方法(manner)といったいくつかの意味要素によって規定されている。この意味要素は、同じ意味フィールド内の動詞を規定するだけでなく、異なる意味フィールドに属する動詞にも含意される傾向がみられるというものである。

以上の研究より、名詞も動詞も心的辞書内の構成要素であると考えられるが、その構造も、脳における処理の部位も独立したものであることが示唆されている。従って、語彙研究において、動詞を対象とした研究を行うことによって、名詞を扱った研究とは異なる知見が明らかになる可能性があるであろう。

#### 2. 聴覚障害児の動詞に関する研究

聴覚障害児の抱える言語獲得の困難性は統語

の問題としても現れる。動詞は統語的情報を含意することから、統語の獲得と動詞の獲得との関連は深いと考えられる。聴覚障害児の動詞に関わる研究においても、時制などの統語に関わる研究がいくつかみられる(Quigley and Wilbur, 1976<sup>28)</sup>; Looney and Rose, 1979<sup>15)</sup>; Payne and Quigley, 1987<sup>27)</sup>)。その一方で、聴覚障害児における動詞の理解や表出に関する研究はきわめて少ないが、以下、それらについて検討する。

斎藤ら(1972<sup>29)</sup>)は、聴覚障害児の語彙の定着を捉えるために、対をなす動詞を題材として定着度のレベルが異なる5つのテストを実施している。その結果、聴覚障害児における定着度は語によって大きく異なると報告している。また、健聴児に比べて正答率が高かった語が9語(行く・生まれる・払うなど)挙げられていた。これらの語からは、語の獲得が容易となる要因は特定できないが、語の抽象度以外にも、語の獲得を困難にする要因があると考えられる。

また、斎藤・桜井・竹石(1974<sup>30)</sup>)と関・都築・草薙(1982<sup>33)</sup>)は動詞の分化に関して検討している。ここでいう動詞の分化とは、対象に応じた動詞の使い分けが可能になることを意味する。つまり、動詞の中には、より包括的な意味をもち、様々な対象について使用可能な動詞(例、切る)と、類似した意味をもつがより限定された対象にしか使用しない動詞(例、刈る)があり、一つのグループを形成している。包括的な意味の動詞だけではなく、限定した意味をもつ動詞をも使用可能である場合を、動詞が分化していると定義している。この動詞の分化に関する検討の結果、聴覚障害児は、限定された意味の動詞も使用できるような文脈で、より広い意味をもつ動詞を代用する傾向が強かったと報告している。さらに、斎藤ら(1974<sup>30)</sup>)は、動詞を正しく使っている児童は助詞の使い分けや文構成も正しいという傾向がみられたと報告している。これは、動詞獲得と統語力とが相互に関連することを示唆するものであろう。

このような動詞と統語的能力の関係は、動詞

獲得の過程にも影響を及ぼすと考えられる。つまり、動詞を獲得していく過程で、動詞が含有する規則性に基づいて、動詞をカテゴリ化して合理的に語彙を構造化していくといえる。この動詞の規則性には、統語的性質と意味的性質が含まれるという知見もあり、この規則性に従って、影山(1996<sup>10)</sup>)は動詞の非対格性という観点による、動詞の分類を呈示している。従来からの動詞の分類として、自動詞と他動詞があった。しかし、動詞の非対格性という観点によると、自動詞はスル型の非能格性とナル型の非対格性とに分類できる。非能格性と各々の主語が統語的に異なる働きをもっており、この違いは動詞の意味に根ざしていると考えられる。澤・相澤(1998<sup>11)</sup>)は、動詞の非対格性の観点から聴覚障害児の助詞の誤りを分析した結果、動詞の非対格性が心理的に存在する可能性を示唆している。このような観点に基づいて、聴覚障害児の動詞の獲得及び理解について検討することで、新たな知見が得られる可能性もある。

### 3. 健聴児の動詞に関する研究

名詞と同様、動詞もその特徴から様々な観点から分類することができる。その分類の一つに心的動詞が挙げられる。心的動詞とは「思う」や「考える」などの動詞に代表される動詞である。目では直接観察できない内的、心的状態を表す語であり、その特性によって事実動詞と非事実動詞に分類することができる(玉瀬, 1995<sup>35)</sup>)。事実動詞とは、命題の事実が必ず真であることを示し、その例として「知る」「忘れる」「覚える」などの動詞が挙げられる。それに対して、非事実動詞とは、必ずしも命題の事実が真とは限らない「推測する」「思う」などの動詞のことを指す。藤友(1979<sup>4)</sup>, 1980<sup>3)</sup>)の報告によると、4歳の時点で「思う」「考える」「知る」「忘れる」などの心的動詞が表出されることが報告されている。

幼児の動詞理解に関する研究として、この心的動詞を取り扱うものがみられ、「心の理論」や子どもの推理能力との関係から、心的動詞を検討する研究もある。しかし、子どもがどのよ

Table 1 心的動詞の条件

動詞/条件	先行知識	現在の理解
知っている	△	△
推測している	—	—
覚えている	○	—

○：呈示有り

△：どちらかを呈示

—：呈示無し

Johnson and Wellman (1980)

うな状況に注目してこれらの動詞を使い分けるのか、つまり、動詞の分化という観点からも検討することは可能であろう。

Johnson and Wellman (1980<sup>9)</sup>) は、4歳から5歳の幼児と小学1年生と小学3年生を対象に「知っている(know)」「推測している(guess)」「覚えている(remember)」の3つの心的動詞を用いて、その理解の発達を検討している。3つの心的動詞の条件はTable 1に示した。課題は先行知識の有無、現在の理解の有無、遂行の結果の正誤によって8条件を設定し、宝探しゲーム形式で実施されている。この実験における先行知識とは、ターゲットが隠されている場所の知識であり、目の前でターゲットが隠される所を呈示された場合、先行知識有りとする。現在の理解とは、ターゲットの隠し場所に関する直接的な知識のことであり、不透明な箱と透明な箱のうち、透明な箱の下にターゲットを隠して、ターゲットが見える状態の場合、現在の理解有りとなる。遂行の結果とは、先行知識と現在の理解から推測される場所からターゲットが存在するか否かのことを指す。

例えば、ある条件では、被験児は2つの箱の内の片方にターゲットが隠されるところを呈示された後に(先行知識有)、ターゲットを一時的に被験児の目の前から別の場所に隠し(現在の理解無)、ターゲットがどこにあるかを被験者に尋ねる。そして、ターゲットの検索に失敗する状況(遂行の誤)で、ターゲットのあった場所を「知っていたか」「推測していたか」「覚えて

いたか」を答えるという手続きで実施された。

その結果、現在の理解及び先行知識がなく遂行の結果が誤っている条件と、先行知識があり現在の理解がなく遂行の結果が誤っている条件では、選択される心的動詞が異なるということから、心的動詞の十分な理解は6歳以降であることが示されている。

我が国においても、同じような手続きによって、心的動詞の理解に関する研究がなされている。玉瀬(1995<sup>39)</sup>)は、4歳から6歳の幼児が心的動詞を区別して理解しているのかについて、「思う」「知る」「入っている」という動詞を用いて検討している。ここで用いられている動詞は、「知る」、「入っている」、「思う」の順序で事実の確実性が高いと規定され、一般動詞である「入る」も含めて検討を行っている。その結果、4歳児は、6歳児と同様に、心的動詞を区別して理解しているということが明らかされている。しかし、「知る」と「入っている」を比べると、幼児は「入っている」という動詞の情報を優先しており、高い確率で事実を確実に叙述している「知る」の情報よりも、一般動詞の「入っている」を有効な手がかりとしていることが示唆された。つまり、心的動詞である「知る」と「思う」は区別しているが、一般動詞の理解を考慮すると、心的動詞の理解は分化の途上にあると考えられる。これは、心的動詞が推論能力などの他の認知的能力と関わる特有の性質をもつことに起因するといえるであろう。

これらの研究では、心的動詞の理解に関して事実動詞及び非事実動詞の理解の年齢は、共通した見解は得られていない、しかし、心的動詞は一般動詞よりも、抽象的な動詞であり、推理能力などの他の認知的能力と関わるために、心的動詞の理解は一般動詞よりも困難である可能性が示唆された。

#### IV. まとめ

本稿では、我が国における聴覚障害児の語彙に関する研究を概観した。さらに、聴覚障害児の動詞に関する研究の意義と今後の展望について

て、文献的考察を試みた。その結果は、以下のよう要約できる。

- (1) 語彙研究で一致した見解として、聴覚障害児の語彙力の特徴は、①健聴児に比べて語彙数が少ない、②発達にともなって語彙数は緩やかに増加する、③抽象概念や自身の生活に関連が薄い語彙などは獲得が困難であり、獲得語彙の範囲が狭い、④獲得が容易な語と困難な語がある、⑤語の意味的広がりがない、⑥語と語の意味的な関連性が弱い、⑦以上のすべての項目において、個人差が大きい、という点が挙げられる。
- (2) 聴覚障害児は統語的な能力の獲得が困難であるといわれている。動詞は統語と関わりが深いと考えられるが、従来、聴覚障害児を対象とした動詞に関する研究は数少なく、動詞の抽象度と語の定着、動詞の分化と使用について若干の知見がみられるのみであった。聴覚障害児の動詞に関する特徴として、①包括的な意味をもつ動詞を、限定した意味をもつ動詞の代用として使用する傾向、②動詞の定着度は語によって異なる、③抽象度以外の性質で、獲得が困難な性質が存在する可能性がある、が挙げられる。今後、動詞の獲得についてより多くの研究が必要である。

また、心的動詞の理解に関する研究から、心的動詞は、抽象的な性質をもち、推理能力などの認知的な能力と関わるという点で、一般動詞と性質が異なる。このことから、一般動詞に比べると、心的動詞は獲得が困難である可能性が示唆され、聴覚障害児の場合について、今後の検討が待たれる。

## 文 献

- 1) Behrend, D.A. (1990) The development of verb concepts: Children's use of verbs label familiar and novel events. *Child Development*, 61, 681-696.
- 2) Breedin, S.D., Saffran, E.M., and Schwartz, M. F. (1998) Semantic factors in verb retrieval: An effect of complexity. *Brain and Lan-*

- guage*, 63(1), 1-31.
- 3) Caramazza, A. and Hillis, A. (1991) Lexical organization of nouns and verbs in the brain. *Nature*, 349, 788-790.
- 4) 藤友雄暉(1979)4歳児の語彙. 北海道教育大学紀要第1部C, 29(2), 151-159.
- 5) 藤友雄暉(1980)幼児における語彙の発達的研究. 北海道教育大学紀要第1部C, 31(1), 71-79.
- 6) 福田暉彦(1967)ろう中学生の言語能力. ろう教育科学, 8(3), 127-128.
- 7) 板橋安人・細田和久(1989)言葉の意味の広がり方に関する予備的研究. 筑波大学附属聾学校紀要, 11, 149-169.
- 8) 伊藤浩子(1970)ろう児の語彙発達. ろう教育科学, 12(1), 18-25.
- 9) Johnson, C.N. and Wellman, H.M. (1980) Children's developing understanding of mental verbs: remember, know, and guess. *Child Development*, 51(4), 1095-1102.
- 10) 影山太郎(1996)動詞意味論. くろしお出版.
- 11) 川井潤(1960)ろう児の言語の特質—連想検査による語彙の面から—. ろう教育科学, 3(3-4), 119-128.
- 12) 国立国語研究所(1980)幼児の語彙能力. 東京書籍.
- 13) 草薙進郎・都築繁幸・板橋安人(1979)聴覚障害児の文理解に関する研究—単語の連想関係とSyntaxを中心にして—. *心身障害学究*, 3, 19-25.
- 14) LaSasso, C. and Davey, B. (1987) The relationship between lexical knowledge and reading comprehension for prelingually, profoundly hearing-impaired students. *Volta Review*, 89, 211-220.
- 15) Looney, A.L. and Rose, S. (1979) The acquisition of inflectional suffixes by deaf youngsters using written and fingerspelled modes. *American Annals of the Deaf*, 124(6), 765-769.
- 16) Martin, A., Haxby, J.V., Lalonde, F.M., Wiggs, C.L., and Ungerleider, L.G. (1995) Discrete cortical regions associated with knowledge of color and knowledge of action. *Science*, 270, 102-105.

- 17) 南出好史・石井武士(1977)聾学校生徒の語彙の評価に関する研究. 福岡教育大学紀要, 26, 4分冊, 109-117.
- 18) 南出好史(1982)聾学校生徒の理解語彙評価に関する研究. 特殊教育学研究, 20(3), 9-16.
- 19) Moog, J. and Geers, A.E. (1985) EPIC: A program to accelerate academic progress in profoundly deaf children. *Volta Review*, 87, 259-277.
- 20) 村井潤一(1970)言語機能の形成と発達. 風間書房.
- 21) 中西靖子・大和田健次郎(1980)絵単語-単語同定語彙検査の作製. 音声言語医学, 21, 217-223.
- 22) 中西靖子・大和田健次郎(1980)絵-単語合わせ語彙検査による聾学校児童の語彙力. 聴覚言語障害, 9(3), 71-76.
- 23) 中富千恵子(1985)聴覚障害児の形容詞の理解について. ろう教育科学, 27(2), 65-74.
- 24) 根本匡文(1967)ろう児の連想反応語の特質について. ろう教育科学, 9(1), 17-26.
- 25) 大島千春・山中千恵子・中野善達(1989)聴覚障害児における形容詞の理解と表現に関する一研究. ろう教育科学, 31(1), 25-43.
- 26) 岡田明(1993)聴覚障害児と視覚障害児の教育基本語彙—ことばの指導マニュアル付き—. 風間書房.
- 27) Payne, J. and Quigley, S. (1987) Hearing-impaired children's comprehension of verb-particle combinations. *Volta Review*, 89(3), 133-143
- 28) Quigley, S.P., Montanelli, D.S., and Wilbue, R.B. (1976) Some aspects of the verb system in the language of deaf students. *Journal of Speech and Hearing Research*, 19(3), 36-550.
- 29) 斎藤佐和・菅野正年(1972)対をなす動詞に関する語彙力調査—聴覚障害児について—. ろう教育科学, 13(4), 148-169.
- 30) 斎藤佐和・桜井敬一郎・竹石真利子(1974)動詞の分化に関する調査—聴覚障害児について—. 聴覚障害, 12, 14-22.
- 31) 澤隆史・相澤宏充(1998)聴覚障害生徒の文産出における格助詞の誤り—「が」, 「を」の脱落・誤用と動詞の非対格性—. 東京学芸大学紀要1部門, 49, 163-168.
- 32) 関圭子・草薙進郎・都築繁幸(1982)聴覚障害児の語彙理解における単語分類能力と単語理解能力との関係について. 特殊教育学研究, 20(3), 44-53.
- 33) 関圭子・都築繁幸・草薙進郎(1982)聴覚障害児の動詞使用における表現の分化について. 心身障害学研究, 6, 117-126.
- 34) 相馬壽明・関根弘子(1986)聴覚障害児童・生徒の語彙に関する研究—感情語を用いて—. 特殊教育学研究, 24(2), 27-34.
- 35) 玉瀬友美(1995)幼児における「思う」と「知る」の理解. 読書科学, 39(2), 41-49.
- 36) 塚田規久(1968)ろう児童生徒の語彙量について. ろう教育科学, 10(2), 45-55.
- 37) 四日市章・斎藤佐和・丹直利(1995)項目反応分析による聴覚障害児の語彙の評価. 特殊教育学研究, 33(2), 51-69.



## **A Review on the Studies of Vocabulary in Children with Hearing Impairments**

**Atsuko SATOH and Akira YOKKAICHI**

We reviewed the studies dealing with the acquisition of vocabulary by children with hearing impairments. Many studies have been published on nouns acquisition and we summarized the results found in those studies about the features in nouns acquisition of children with hearing impairments in Japan. While many studies suggested that the abstractness of word would be one of the main cause of difficulty in vocabulary acquisition, the cause other than the abstractness can not be clarified. On the other hand, there are few studies on verbs acquisition in children with hearing impairments. As verbs are strongly related with syntax of sentence, and the children with hearing impairments have difficulty in treating syntax, studying about verbs acquisition in those children should yield valuable information on their language acquisition. We also suggested that we need to clarify the acquisition process of mental verbs which seemed to have different features in comparison with other verbs.

**Key Words :** hearing-impairment, vocabulary, verbs, nouns